

耐寒性・収量性が高く、優れた製茶品質を有する 緑茶用品種「つゆひかり」

農業総合センター山間地帯特産指導所

本県のチャ品種園は、79%が「やぶきた」となっています（H26・在来を除く）。栽培品種が「やぶきた」に偏重することで、産地では病害の多発・香味の画一化等の問題が生じていることから、新品種の導入による品種構成の改善が大きな課題となっています。

「つゆひかり」は、多収性で高い耐寒性・炭そ病耐病性を有し、一番茶荒茶の全窒素・遊離アミノ酸含有率が高く製茶品質も優れていることから、本県茶産地に適する品種として選定しました。

「つゆひかり」の生育特性

「つゆひかり」は、「やぶきた」に比べ樹勢が強く、一番茶収量は「やぶきた」より約40%増加します。また、耐寒性にも優れます（図1、図2）。

チャの主要病害である炭そ病にも高い耐病性を有します（図2）。なお、萌芽期・一番茶摘採期は「やぶきた」とほぼ同時期となります。

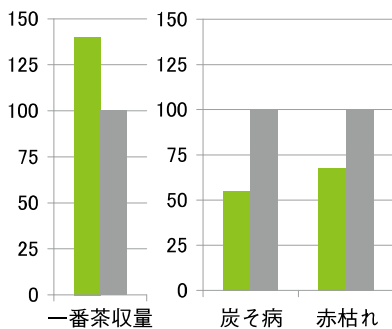


図2 同一年生「つゆひかり」と「やぶきた」の一番茶収量及び炭そ病・赤枯れ（寒害）の発生状況（グラフ表示は■「つゆひかり」、■「やぶきた」。各グラフともに「やぶきた」の数値を100として表示）



図1 生育状況の比較

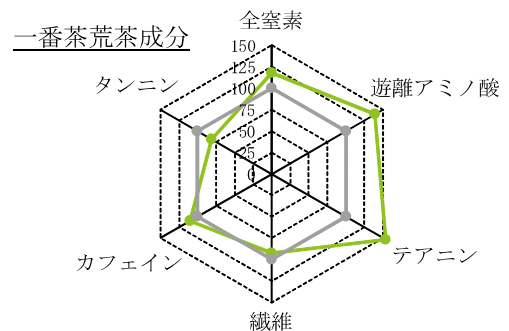
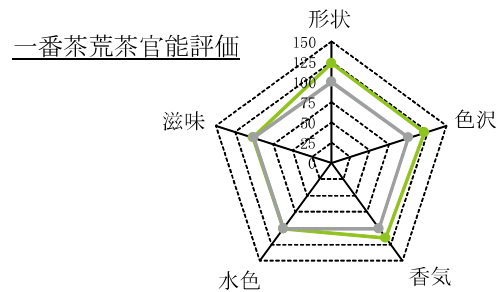


図3 同一年生「つゆひかり」と「やぶきた」の荒茶品質（グラフ表示は■「つゆひかり」、■「やぶきた」。各グラフともに「やぶきた」の数値を100として表示）

「つゆひかり」の一番茶荒茶品質

官能審査による「つゆひかり」の一番茶荒茶品質の評価は、「やぶきた」より総合的に優れます。また、「つゆひかり」の一番茶荒茶全窒素・遊離アミノ酸含有率は「やぶきた」に比べ高く、タンニン含有率は低くなる傾向があります（図3）。

実用化に向けた対応

「つゆひかり」の県内における栽培面積は4.2ha（H26）となっています。生産者からは、生育特性や製品の特徴として「初期生育がよく、収量性に期待が持てる」、「甘みやさわやかな香りが感じられる」等との評価を得ています。今後、茨城県茶生産者組合連合会や各茶生産団体を対象に、新植・改植の際の導入品種候補として情報提供を行っていきます。